

知求会ニュース

2022 年 04 月

第 81 号

◎ 他大学院 博士号取得、おめでとうございます！

石崎 達也 (*ISIZAKI Tatsuya*) (国際文化研究専攻・14 期生)さんが、2021 (令和 3) 年 3 月 31 日(水曜日)に東北大学大学院 文学研究科 博士後期課程 言語科学専攻で、以下のように学位を取得されました。なお、論文要旨などは本号の「博士録 56」に掲載されていますので、併せてご一読下さい。

学位名：博士（文学）

学位番号：文博第 591 号

学位授与機関：東北大学

学位授与日：2021 年 3 月 31 日

論文名：母音のフォルマント移動と緊張性

◎ 博士後期課程 博士号取得、おめでとうございます！

三浦美恵子 (国際学研究専攻・13 期生)さんが、2022 (令和 4) 年 3 月 25 日(金曜日)に昨春授与されたアザリア ビンティ ザハルディンさんに続いて博士（国際学）の国博第 32 号の博士号学位を授与されました。なお、論文要旨などは本号の「博士録 57」に掲載されていますので、併せてご一読下さい。

Acquah Stanislaus (国際学研究専攻・13 期生)さん (国博第 30 号)・トン ヌー タン トゥ(国際学研究専攻・13 期生)さん (国博第 31 号)・増山貴子(国際学研究専攻・12 期生)さん (国博第 33 号)・鄭春美(国際学研究専攻・9 期生)さん (国博第 34 号) らも博士号学位を授与されました。

これまでの国際学部・国際学研究科(修士課程および博士前期課程)出身者の学位取得者は、博士(国際文化) (東北大学) 2 名・博士(文学) (名古屋大学) / (筑波大学) / (東北大学) 4 名・博士(人文科学) (お茶の水女子大学) 1 名・博士(人文学) (パリ東大学) 1 名・博士(芸術学) (筑波大学) 1 名・博士(社会学)(一橋大学) 1 名・博士(農学) (東京農工大学連合大学院) 2 名・博士(国際学)(宇都宮大学) 20 名・博士(経済学) (名古屋市立大学) 1 名・博士(観光経営学) (慶熙大学校) 1 名・博士(人間・環境学)(京都大学) 1 名・博士(学術) (杏林大学) / (筑波大学) / (東京大学) / (一橋大学) 4 名・博士(国際開発学) (名古屋大学) 1 名・博士(国際関係・紛争・平和学)(キングス・カレッジ・ロンドン) 1 名の計 41 名です。

◎ 博士前期課程、修了おめでとうございます！

2022(令和 4)年 3 月 25 日(金曜日)午後 1 時 00 分から 5 号館 A 棟 4 階大会議室にて、2021 年度学位記授与式が開催されました。

今回の修了者は、国際交流研究専攻の第13期生の井田綾さん(国修第564号)の1名でした。在籍者があと1名いますので、来年には国際学研究科 博士前期課程は終焉を迎えます。

◎ 修士課程、修了おめでとうございます！

国際学研究科博士前期課程の後継である修士課程 地域創生科学研究科 社会デザイン科学専攻グローバル・エリアスタディーズプログラムにおいて修士（国際学）8名および多文化共生学プログラムにおいて修士（学術）25名が誕生しました。

◎最終講義対面およびZOOM オンライン開催

2022（令和4）年3月12日（土曜日）午前10時半から12時まで、重田康博先生の最終講義が8号館8D11教室において、対面およびZOOM オンラインで開催されました。演題は『グローバル・イシューへの旅—国際学部15年を振り返って』でした。参加者はおよそ対面40名、ZOOM 96名でした。

2022（令和4）年3月12日（土曜日）午後3時から4時半まで、田巻松雄先生の最終講義が8号館8D11教室において、対面およびZOOM オンラインで開催されました。演題は『社会学的・国際学的な問題意識をベースとする10のワードとメッセージ』でした。参加者はおよそ対面79名、ZOOM 82名でした。

◎令和3年度 同窓会連絡協議会報告

2022（令和4）年1月24日（月）午後4時から、ZOOM オンラインにて、令和3年度同窓会連絡協議会が開催されました。出席者は池田宰学長・藤井佐知子理事・吉澤史昭理事・横田和隆理事・鈴木邦雄理事・中村真 国際学部長・小宮秀明 教育学部長・入江晃亘 工学部長・山根健治 農学部長の大学側10名と事務局担当者3名、吉葉恭行 国際学部同窓会会長・志村なぎさ 同副会長・行澤真悟 同副会長・間宮栄二 共同教育学部同窓会副会長・大澤智恵子 同事務局・清水由行 同窓会陽東会会長・松澤康男 農学部峰ヶ丘同窓会会長・大塚国一 同副会長・小笠原勝 同理事長の同窓会側9名でした。議事内容は、協議事項として第6回宇都宮大学ホームカミングデーの開催時期について、また各学部等同窓会からの活動報告・要望等として、1. 各学部等同窓会の活動報告等について、2. 大学に対する要望等について、3. その他、そして大学の報告事項等がなされました。

◎ 教職員人事異動

田巻松雄国際学部名誉教授

田巻松雄先生が、3月31日をもって定年退職されました。国際学部には1996年4月から26年の間在籍され、多くの方が先生にお世話になったことと思います。大変お疲れ様でした。

重田康博国際学部客員教授

重田康博先生が、3月31日をもって定年退職されました。国際学部には2007年4月から15年の間在籍され、多くの方が先生にお世話になったことと思います。大変お疲れ様でした。

鎌田美千子先生

鎌田美千子先生は、2020 年 8 月 31 日付で退職され東京大学大学院人文社会研究科附属次世代人文学開発センターへ転出されました。

モリソン・バーバラ先生

モリソン・バーバラ先生は、2021 年 10 月 4 日付で退職されました。

ガデミ・アミン先生

ガデミ・アミン先生が、3 月 31 日付で退職され大阪大学へ転出されました。

金子亜美先生

金子亜美先生が、3 月 31 日付で退職され立教大学へ転出されました。

上原弘再雇用職員

上原弘さんが、3 月 31 日をもって定年退職されました。当同窓会では 5 年間にわたりさまざまなことでお世話になりました。

坂本悠木美事務補佐員

坂本悠木美さんが、3 月 31 日をもって辞職されました。

野川隆志事務長

野川さんが、4 月 1 日付で学務部長に異動されました。

◎ 掲載記事紹介

1. 毎日新聞（令和 4 年 1 月 1 日）29 面に、《一人も取り残さない わたしたちの学校① とちぎ自主夜間中学》コーナーで「10~70 代国籍ばらばら 元教員や大学生が支援」と題して、副校長田巻松雄（国際学部教授）先生らの記事が掲載されました。
2. 下野新聞（令和 4 年 1 月 18 日 xx 面に、「高際氏が立候補へ」「栃木市長選 選挙戦見直し」の内容で高際澄雄（国際学部名誉教授）先生の記事が掲載されました。
3. 下野新聞（令和 4 年 2 月 4 日 22 面に、「日本語教授法講座スタート 小山市国際交流協会」と題して、神山英子（三重大学教育学部特任講師）（国際学研究科国際社会研究専攻第 7 期生）さんの記事が掲載されました。
4. 下野新聞（令和 3 年 3 月 10 日）19 面に、「暮らし応援など 5 施策 栃木市長選 高際氏が公約発表」と題して、高際澄雄（国際学部名誉教授）先生の記事が掲載されました。
5. 下野新聞（令和 4 年 3 月 16 日）3 面に、「ウクライナ侵攻 3 週間 「最悪のシナリオ」懸念」と題して、「宇都宮大 清水准教授 核軍縮必要性を強調」の内容で、清水奈名子（国際学部准教授）先生の記事が掲載されました。

◎ 国際学部だより

1. 下野新聞（令和 3 年 12 月 19 日）22 面に、《選挙どうする？ 若者低投票率 向上の鍵は 本県出身、30 代識者に聞く》コーナーで「社会とのつながり構築を」の題で NPO 法人とちぎユースサポーターズネットワーク代表理事岩井俊宗さん（国際学部国際社会学科第 13 期生）の記事が掲載されました。

2. うつのみや 12月号 No.1749 (令和3年12月1日) 10面に、『「スーパースマートシティ」の実現に向けて』コーナーで「転んでも立ち上がれる「挑戦」できる環境に」の題でNPO法人とちぎユースサポーターズネットワーク代表理事岩井俊宗さん(国際学部国際社会学科第13期生)の記事が掲載されました。

特別寄稿

第80号でお知らせした岡田三郎先生の訃報に際して、国際学研究科長兼国際学部長の中村真先生から追悼文を寄稿していただきました。

「岡田三郎先生をしのんで」

中村 真

岡田三郎先生が、2021年8月30日に故郷の山口県において逝去されました。享年75歳ということです。つい先日、ホームカミングデーでお目にかかったばかりのような感覚がありましたので、ご逝去の知らせにあたり、大変驚き、寂しく感じました。また、この度は、岡田三郎先生への追悼文の寄稿依頼をいただき、不思議なご縁を感じているところです。

なぜこのように感じたのかといいますと、岡田先生が国際学部を退職されたときに、ちょうど私が国際文化学科長を務めておりましたため、慣例により、挨拶文を国際学部研究論集に寄稿いたしました。わずか10年余り後にこのような形で岡田先生に寄せる文章を書くことになるとは思いませんでした。

さて、岡田先生は、2009年4月から2011年3月に学部長・研究科長をお勤めになり、学部と研究科に多大な貢献をされました。フォーマルなご業績につきましては国際学部研究論集31号に掲載されていますので、以下のリンクをご覧ください。また、ご業績の多くもこの論集に発表されていますので、あわせてご参照ください。

https://uuair.repo.nii.ac.jp/index.php?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_snippet&index_id=374&pn=1&count=20&order=17&lang=japanese&page_id=13&block_id=58

岡田先生は、私の採用前の面接をはじめ、着任時に宇都宮での生活を始めるにあたってのご支援に加え、研究室も同じフロアで、毎日お目にかかるような関係でしたので、ここでは、少し個人的な思い出などを交えて書いてみたいと思います。

最も記憶に残っているのは、岡田先生の物事にこだわらない、飄々とした物腰や話しぶりです。当時はまだ、喫煙は一般的で、研究室でタバコを燻らせながらゆったりとお話されていた姿が思い浮かびます。このイメージは、『国際学部20年国際学研究科15年の歩み』に寄稿された、歴代学部長からのメッセージにもよく反映されているように思いました (<http://www.kokusai.utsunomiya-u.ac.jp/about/img/20years.pdf>)。読書と散歩と書き写しの3つのことをしていると近況を報告され、国際学部・研究科の成果が、学生や大

学院生の力と、良心的な努力の積み重ねによるものと記されています。岡田先生は、国際学部設置翌年の 1995 年に 1 期生を迎え入れてから 2011 年のご退職までの間に 2000 人近くの学部生、大学院生との接点があったものと思います。懐かしく思い出されるみなさんも多いことと思います。

私が宇都宮大学に着任したのは、国際学部設置直前の教養部の最後の時期でしたので、改組に関わるあわただしさは感じられましたが、個々の教員は基本的に自分のペースで時間を使うことができ、ゆったりした時代であったと思います。学部教員による研究会や懇親会も学期の区切りを待たずに開催されておりまして。その時間は、自分の興味関心を、異なる分野の教員に問いかけたり、議論をしたりするような機会にもなっていたと思います。

私は、2003 年に、アメリカでたまたま目にした絵本の作者に関心をもち、岡田先生にお話を伺ったことがあります。その絵本は、子どもたちのエイズに関する理解を深め、排除に結びつかないようにという意図で出版されたものですが、その絵が大変印象的だったのです（“AIDS: You Can’t Catch It Holding Hands”, Lapis Press, 1987）。ニキ・ド・サンファル（Niki de Saint Phalle）という人の作品で、後で調べてみると、栃木県内の那須高原にその人の作品だけを展示する美術館があることが分かりました（ニキ美術館。現在は、オンラインでの公開のみのようです。参考リンク：<https://niki-museum.jp/contents/>）。この人は、女性の体をテーマにした多くの彫刻作品を作っているようでしたが、全体的に、前衛芸術と呼ばれるような作品が多く、私にはあまりよくわかりませんでした。前衛芸術といわれる作品は、私には美しくないと思われることが多いのですが、芸術と美術の関係についてはどのように考えられているのだろうといった全くの素人の関心について、岡田先生に解説していただけないかと考えて、お話ししたのだと思います。その時の岡田先生の反応はとても誠実で、自分もよく知らない作家だが、興味があるので少し調べてみたいということでした。そこで一緒にその美術館に出かける計画を立てましたが、その後、学務が忙しくなる一方で、かなわぬ夢となりました。

岡田先生のご専門の一つが、ギリシャ、ローマ時代の美学でしたので、関係する邦訳の文庫本を多数お持ちでした。ご退職の際にいただいたこれらの本の一部は、今も私の資料室に残っています。まだ読み終わっていないものも多いので、これから手に取るたびに、読書を愛された岡田先生のことを思い浮かべることになると思います。

（2022 年 3 月 20 日原稿受理）

研究室訪問 54 第 9 号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

「さて、どんな生活になるのやら。」

田巻 松雄

3月12日の最終講義が終わった。24日の教授会とその後のお別れ会が終わった。そして、25日の卒業式が終わり、あと数日で退職を迎える時期となり、その気になってきた。この間いくつか質問された。

まず、卒業式では、ゼミの卒業生から「先生、これから何するんですか？」と聞かれた。このストレートすぎる質問は答えるのが難しかった。質問者（この学生はとても明るくていつもはきはき話す）は浮かんだことをそのまま口にただけだろうが、質問というのはある程度具体的でないと答えられないなということを改めて感じた。今、ずっと昔、海外のホームレスを題材にした国際学部の卒論副査をしたときのことを思い出した。この卒論はとてもレベルの高い卒論だったが、学生が現地調査でホームレスの人に「どうしてホームレスになったんですか」という質問をしたことについて、そんな質問をしても誰も答えられないよ、とコメントした。関係あるかな？

教授会終了後のお別れ会はオンラインで開催され、20名程度の教員が参加した。大半の参加者は、思い出や感謝の言葉（誠に有難うございます・・・）を述べたが、最初と最後のほうで質問が出された。1つ、「若さの秘密？秘訣？は何ですか」。「若さと馬鹿さは紙一重」であることを断ったうえで、ミニバスケット（小学生女子）の指導をずっと（20年以上）続けてきたことが関係しているかもしれないと答えた。22日（火）にコロナ禍の影響で2か月出来なかった練習を再開した。毎回、1年生から6年生まで10数人の子どもたちと一緒に走り回る時間・空間によって、身体も心もリフレッシュし、若さが少しだけ維持されてきたことは確実と思える。想像したくないが、走れなくなった時がバスケットサヨナラする瞬間である。1つ、「特に楽しみにしていることは何ですか」。真面目に答えますと前置きしたうえで、結構忙しい生活を長年続けてきたので、研究に専念してみたい、満足できるものが出来るのか、挫折するのか、楽しみにしていると答えた。今、3つのテーマが頭に浮かんでいる。

最終講義の冒頭で、今年度特に大きかったこととして、論文指導と自主夜間中学開校をあげた。論文指導では、2人の論文指導はヒヤヒヤの連続であったが、なんとか3人とも無事終了したことで安堵した。中国人学生5名と韓国学生1名の修論はすべて夜間中学をテーマとするものとなったことも印象深い。卒業論文も2つが夜間中学をテーマにした。そのうちの1つは10万字を超える大作となった。

昨年の10月から始めたとちぎ自主夜間中学の活動を通して、実に様々な学習者と出会ってきたが、そのなかで学齢を超えた10代の外国人生徒の高校進学を主に応援してきた。かれらは来日してまだ日が浅く、日本語能力は初心者レベルである。学齢超過者4人のうち1人は中学校に入学できたが、他の3人は中学校に在籍することなく受験に臨んだ。中学校に在籍していないと、受験資格を確認するために成績証明書を母国から取り寄せる必要が出てくる。また、学校での指導が無いなかで、出願書類を準備することは結構大変であった。外国人の親子で出願書類を作成することはほとんど難しいであろう。この4人絡みで栃木県教育委員会と某市教育委員会にそれぞれ数回通った。

中学校に入学できた K はめでたく全日制の高校に入学できた。K の夢は宇宙飛行士になることである。将来デザイナーになりたいと語る S は、全日制は 2 回不合格だったが、何とか定時制の高校に入学できた。日本での滞在は 2 年程度となるが、まだ電車もバスも 1 人では乗ったことがなく、将来の夢もはっきりしない R は定時制で不合格となり、最後の望みをかけて通信制を受験した。今日が合格発表で、結果は郵送でおそらく明日届く。何とか受かってくれ！と願うばかりである。もう一人の A は数か月母国に戻るが必要になったため、来春に受験することとなった。高校に入学出来ても、勉強についていくことは大変だろうと思う。かれらが高校入学後も自主夜間中学に通ってくるかは分からないが、もちろん大いにウェルカムである。

自主夜間中学と言えば、昨日 2 か月ぶりに学習活動を再開したところ、いじめが原因で不登校となり人間不信にも陥ったと思われる F が初めて学習活動に参加した。F はなんとか会場に足を運んだが、学習活動をしている場所には入ってこれなかった。数週間前に大学で個別に 30 分程度話すことが出来たが、その際にも参加できるかどうか不安と語っていた。F は昨日最後まで参加し、時には笑顔で語り、「楽しかった」と言って帰って行った。一歩進むことが出来たかなと感じた一日だった。

4 月からの新しい生活を前にして、「さて、どんな生活になるのやら」との心境である。振り返ると、ほとんどいつも「まずはやってみようか」の精神でいろいろなことに取り組んできた気がする。環境は変わるが、この精神で淡々と行ってみたい。国際学部の 26 年？は実に楽しいものであった。支え、励ましてくれたすべての人に感謝申し上げたい。

(2022 年 3 月 28 日原稿受理)

博士録 56 第 22 号から国際学部、国際学研究科に関係する同窓生に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

「母音のフォルマント移動と緊張性」

石崎 達也

博士論文要旨

本論文では、音声学における 2 つの重要な特性であるフォルマント移動と母音の緊張性について考察を行った。さらに、外国語の発音に関する教育分野で音声学の有用性は非常に高いことから、当該分野の発展への寄与の可能性について考察を行った。まず、緊張母音と弛緩母音の定量的な定義について考察した。母音の緊張性については Jakobson, Fant and Halle(1951)及び Chomsky and Halle(1968)が緊張性と声道空間との関連性を指摘し、声道の物理的な位置関係により緊張母音と弛緩母音の違いについて言及した。本論文では、母音の持続時間内における緊張性の間接的な可視化の手法を確立した。また、有限時間における母音の緊張性の議論をさらに拡張し、時刻 t における母音の緊張性を考察した。発音教育への応用に関する研究では、学習者が英語の緊張・弛緩母音のペア $/i:/, /ɪ/$ の発音を学習する際に使用可能な緊張性の違いを評価する手法について考察した。上述

の通り、母音の緊張性を考察する上で時間依存の概念を導入し、数理モデルを本論文で提示した。このモデルに基づき、学習者により産出された母音の緊張性を相対的に「緊張状態」または「弛緩状態」として識別することが可能である。緊張性の可視化フローは、発音教育における緊張性の定量的評価を音響的な観点でリアルタイムに実現することを可能にすることを明らかにした。

コメント

私は2014年に国際学研究科博士前期課程国際文化研究専攻を修了しました。在学中には音声学の研究をさせていただきました。

音声については子どもの頃から興味を持っていましたが、それは私の経験に基づきます。私は小学校1年生から3年間ほど、当時としては珍しい宇都宮市の英会話学校に通っていました。小学校の授業が終わった後に両親が送り迎えしてくれたり、時には1人でバスを使い通っていました。私の記憶では、通っていた小学校のほとんどの同級生は英会話学校どころか塾にさえ通っていなかったと思います。当時は今のように塾の数自体も少なかった時代です。

その英会話学校で、アメリカもしくはカナダの女性の先生から毎週英会話を教わっていました。教室の中には、宇都宮市の他の学校の子どもたちが5名ほどいて楽しい雰囲気だったと思います。ハンバーガーの自動販売機も建物の通路に設置されていたと記憶しており、宇都宮市でありながら北米の学校にいるような別世界の感じも子どもながらに若干ありました。また暗唱大会というものがあり、長文を覚えてみんなの前で話すイベントがありました。そのような長文の英語を負担なく覚えてしまう子どもの能力には、当時を思い出すと驚いてしまいます。

その英会話学校で、北米の女性の先生が私に英語の音声を教えてくれました。当時の私は、英会話学校で喋る時と小学校で喋る時で発音の仕方を変えるのが、直接的な表現を使うと「面倒だ」と思った記憶がわずかにあります。環境に応じて自分の頭の中を切り替えていたような感覚があったのを覚えています。

ある大学の授業で最近教えていた時に、**bunched R** という R 音を扱いました。これは舌先を後方に反り返させるものとは異なる調音方法で実現します。この **bunched R** は、私が R の発音をするときに実現する音声です。おそらく少なくない日本語母語話者による R の発音とは異なると推測します。この **bunched R** を私が実現できるのは、英会話学校にて北米の先生が6歳ごろの私に教えてくれたおかげであり、両親が幼少の私に学習機会を与えてくれたおかげであると思っています。当時の同級生が享受していなかったこのような貴重な経験は私の財産であり、私の現在に繋がります。

私はこれまで言語学以外にも物理学や半導体工学などの分野に携わりました。机の上での学問だけではなく毎週のようにスキーに行ったり、元日本チャンピオンにキックボクシングを教わったりしました。また私の人生においては大切な娘の存在はとても大きいです。

様々な環境で色々と経験することは、新しいアイデアの創出と豊かな人生に貢献し得るのではないかと思います。

(国際学研究科 博士前期課程 国際文化研究専攻 第14期修了生)

(2022年2月21日原稿受理)

博士録 57

「3年間を振り返って」

三浦 美恵子

1. 博士論文の概要

題目は、「障害と能力・才能は共存するー2E 教育的観点からの研究ー」であり、障害と能力・才能が共存する事例研究を行うことを目的とした。先行研究やアメリカにおける実践例等を検討した上で、とりわけ発達障害を持つ人々の療育と指導の在り方について具体的な示唆を得るため、音楽と美術の分野で能力を発揮した2人に焦点を当て、両親や指導者などが行った実践の具体的な内容について調査・分析した。

第1章「特別支援教育の対象となる児童生徒」では、対象者の推移を示し、発達障害に焦点を当てた。また、2016年に文部科学省が実施した調査から、25市町の特別支援学級における日本人と外国人児童生徒の在籍状況について概観した。第2章「先行研究」の最後の節では、障害と能力の共存について、1920-70年代に海外で報告された研究に加えて、日本人の研究者による近年の研究について言及した。

第3章「障害と能力・才能は共存するーTwice Exceptional (2E)」は、2E（障害と才能を併せ持つ人々）について、アメリカにおける2Eの歴史、法律、定義、識別方法、2E児童生徒の在籍状況と教育プログラムに関するものである。本章後半には、2021年11月以降、メリーランド州のモンゴメリー公立学校に勤務する2Eの専門家やその他関係者から直接聞き取った内容を加えた。例えば、英語を母語としない子どもたちに対して、言葉を介さずに使用できる非言語性の知能検査として、UNIT (Universal Nonverbal Intelligence Tests)、NNAT (Naglieri Nonverbal Ability Test)、CogAT Test (Cognitive Abilities Test)などが使用されていることを始め、文献調査だけでは得られなかった情報を入手した。

第4章「発達障害とさまざまな能力を持ち合わせる人々ー映画に見られる多様性」では、発達障害（自閉症・アスペルガー症候群）の人物が登場する映画16作品（1988-2020年：アメリカ、韓国、フランス、日本、スウェーデン、イギリス、イスラエル、イタリア、インド、シエラレオネ）について概観した。同じ障害であっても、一人一人は異なる人間であること、彼らを愛し、見守り、応援し続ける人々（家族、教師、指導者、友人、恋人など）の大切さについて示唆を得た。

第5・6章は、本論文の要となる発達障害と音楽・美術の能力が共存する事例研究であり、ヴァイオリニストの廣澤大介氏と版画家・画家の石村嘉成氏に関するものである。廣澤氏

については、母親、フリースクール主宰者、ファンクラブ会長、3名の音楽・ヴァイオリン指導者、石村氏については、両親と美術教師が行った療育や指導に、2E教育的なステップが含まれていたことについて分析した。

終章では、障害や外国人などの「ラベル」を全て取り除き、人間というもののだけが残った時に、その人の真の姿に近づくことができることについて、また廣澤氏と石村氏の事例から、本人の好きなことや得意なことを目ざとく発見・尊重してさらに伸ばすという方向性を持ち、発達障害児および発達障害者を療育、指導、応援する周囲の人々の存在が不可欠であることについて述べた。

2. 博士課程を終えて

3年間の博士課程が修了を迎えたが、よく分からないことだらけだった。論文投稿の段階でうまくいかず、査読付論文の掲載が決まったのは、時間的にギリギリのタイミングだった。最後になって一筋の光が差し込んだとは言え、気持ちを立て直すのが難しく、特に3年生の夏頃は心身共に、とても苦しかった。しかし、思わぬ人々が思わぬ方法で力を貸してくれたことも多くあり、そんな時に人の優しさや有難さを強く感じた。

特に、本論文第5・6章で紹介した11名の調査協力者の皆さんには感動の連続だった。この想いが最強の原動力になったことは間違いなく、この人々との出会いが3年間で最大の収穫であった。全ての方々が真剣に、本気で向き合ってくれ、人に寄り添い、育て、教え込むとは如何なることかを私が理解できるように教示してくれた。とりわけ、石村嘉成さんの父親である和徳さんのスペシャルサポートに対しては何をしても返せないほどであり、感謝しかない。長年に渡り、熱く、本気で打ち込む人々の姿から、なぜ廣澤さんと石村さんが音楽と美術の分野に辿り着き、続けることができているのか、その答えの一部が分かったような気がした。

本研究を通して、人種、言語、障害の有無など数多くの違いを超越し、人間に通底する事柄に目を向けることが大切だと思うようになった。人間とは何か？障害とは何か？各々に潜在した多種多様な能力を引き出し、伸ばすために必要なことは何か？このような問いについて考えることの面白さを知った。また、どんなに周囲が変化しても変わらずに残り続けるような、真に価値のあることについて考え思い巡らす時間は、とても尊く、豊かな気持ちにさせてくれるものだった。今後は、本質的かつ普遍的な事柄を探究する思考力を鍛え、そのような考え方に端を発した研究ができる人間になりたい。

最後に、職場である国際医療福祉大学に心から感謝したい。2022年度は勤続10年目の年となり、自分にとっては一つの節目となる。右も左も分からぬ時代から現在に至るまで、働くことと学ぶこと、この両方を満たす贅沢な機会を存分に提供し続けてくれたことが、いかに有難いことか、最近になって痛感している。職場や仕事、学生たちに育てられていることも得難い財産である。もっと有能かつ役立つ働き人になることで、お世話になった人々や組織に恩返ししていきたい。

(国際学研究科 博士課程 国際学研究専攻 第13期修了生)

(2022年3月16日原稿受理)

知究人 37 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうぴと)を設けました。

「地域創生科学研究科での学び」

宇都宮大学大学院

地域創生科学研究科 社会デザイン科学専攻

多文化共生学プログラム1年

鈴木 アリサ

2021年3月に国際学部国際学科を卒業し、4月から地域創生科学研究科社会デザイン科学専攻多文化共生学プログラムで学び、丁貴連先生のご指導のもと越境文学についての研究をしています、鈴木アリサと申します。

新型コロナウイルス感染拡大の影響で、2020年のようにほとんどの授業がオンラインで行われるかと思いきや、先生方をはじめとする大学関係者の方々のご協力のおかげで、対面授業も増えた1年となりました。

「多角的な視点」。この言葉は今ではごく普通に使用されるものとなり、私もよく使ってしまうのですが、地域創生科学研究科に進み、改めて「多角的な視点」とは何なのかについて考えさせられました。地域創生科学研究科では、1年次に研究科学生全体を対象にした必修授業があります。各プログラムの学生が最低必ず一人入ったグループに分けられ、与えられた課題に沿って議論し合う授業は、とても新鮮なものでした。越境文学を研究する私の意見、自動車のタイヤの機能性をあげる研究をする学生の意見、抗がん剤の研究をする学生の意見は全て異なり、真の意味での「多角的」を学びました。全て異なる意見とは、相反するものではないものの、それぞれの人の「優先順位」が共通するとは限らないため、意見をまとめる過程には苦労を要しました。「地域のために、社会のために、といった同じ目的があっても、立場によって優先するものが異なる」、これはこの研究科だけでなく、職場でも、どこでも同じだと思います。「多角的な視点」を活かすためには、どこでどのように妥協し、理解し合うのか、ということが大切だということを学びました。

立場によって優先するものが異なると述べましたが、その前にまず「人」が一番であることはどの分野でも同じです。今を生きている人だけでなく、過去を生きた人たちの歴史、その思いを明らかにして、今に繋げる、という研究もあります。私は、日本語を母語としない外国人が日本語で書いた小説、いわゆる越境文学から、外国人が日本語で書いた思いを明らかにし、作者が映し出した日本社会を浮き彫りにしたいと考えています。日本は、多文化共生社会だといえるのでしょうか。その答えを、越境文学を通して、人々(日本語で執筆した作家たちと描かれた外国人)の思いに触れ、導きたいと思っています。「多文化共生」

で私が優先するものは共に生きる人々の「思い」です。数値には現れない、生きづらさなどの悩み苦しき、といった現実を明らかにしたいです。

地域創生科学研究科は「人」のために研究する場所です。同じ目的のために様々な分野の研究が進められていますが、異分野融合研究のみならず意見を交わせるこの研究科での学びを最大限に活かした研究にしたいです。ありがとうございました。

(国際学部第 23 期生・国際学科第 01 期生)

(2022 年 3 月 19 日原稿受理)

海外だより 31 第 27 号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

海外留学今昔 32 第 35 号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**海外留学経験者**および**海外留学中の在学者の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

学生サロン 20 知求会ニュース第 41 号より現役学部生によるコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**現役学部生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

キャリア指南 15 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPO や企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**キャリア指南にふさわしい卒業生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

フォーラム 2022 年の卯月を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦労しています。)

**「You've got to find what you love
(熱中できるものを探し続けろ)」**

株式会社ヘッドクリエーション
代表取締役 仲田 和正

脳科学的には、興味を持った瞬間にしか人は学ばないといわれています。
高校生の時ビートルズに熱中し、ロックバンドを結成して楽曲を一生懸命コピーしました。
週末はジャズ喫茶(ライブハウス)に出演し、当時、大卒初任給の 4, 5 倍くらいのギャラを得ていました。

ヒッピー (Hippie : 規制の社会や価値観を否定し脱社会的行動をとった若者) 文化の象徴であるカウンターカルチャーに憧れて、ベトナム反戦運動が激化する 70 年代初頭に渡米しました。ヒッピーは、イデオロギーに基づく社会変革よりも、個人の意識変革を目指す文化運動でした。ピーコックレボリューション (孔雀の雄の様に男性が着飾る) の洗礼を受け、古希を過ぎた現在もピアスをしています。

渡米してからは、厳しい現実と向き合う日々の連続でした。一つひとつ乗り越えていかなければならない異国での様々な体験が、主体性や意思決定する力を与えてくれました。ハイスクールで学び直し、ヘアデザインの専門学校を卒業後にカリフォルニア州の試験を受け、ヘアドレッサーのライセンスを取得しました。その後、ビバリーヒルズにある世界チャンピオンのサロンで働くチャンスを得ました。ハリウッドスターをはじめ政財界のセレブリティと直に接する機会もありました。サロンではプロフェッショナルな最高の技術以上に、知的で社交性を備えた人間力が求められました。

帰国後、1977 年に株式会社ヘッドクリエーションを設立し、理美容業、ヘアケア商品の開発・製造・販売、ヘアショー、講演活動などの業務を行っています。職業奉仕活動 (Vocational Service) を通して、ニューヨーク、ロンドン、パリ、ミラノ、バルセローナなど先進諸国の大都市を訪れてきました。華やかな都市の裏側で物乞いをする、ストリートチルドレンの姿を目にしてきました。

また、国際ロータリーに入会し国際奉仕活動 (International Service) に関心を寄せるようになりました。1991 年 6 月、ピナトゥボ火山の大爆発直後に被災地域から緊急人道支援の要請を受け、義援金を拠出する実務に関わりました。以後、フィリピンに設立した NGO 法人 Mirai Ni Kibou Foundation の日本代表として、飢餓や貧困に喘ぐ地域の人々を対象とする、人道支援活動に従事しています。実践者として直面した問題意識から、宇都宮大学の門をたたき、国際学研究科に入学しました。還暦を目前にして、初めて学問という知的認識領域において真剣に学びたいという、知的好奇心を超える社会的な目的が私自身を鼓舞しました。これまでもバンド演奏や異国での生活、NGO 活動など、常に刺激的で熱中できるものが身近にありました。新しいことにチャレンジするワクワク感は、学問という人間形成の場においても全く同じ感覚でした。You've got to find what you love !!

特に田巻松雄という師との出会いは刺激的で、彼の問題意識に通底する「共に生きる社会」を考えるという概念は、私の本質的な問題意識や研究目的にも通じる大切な要素でした。「持続可能な人道支援には何が必要か」という博論でも、「共に生きる社会」とは何かを考えるという視点の重要性が、問われていたように感じています。2006 年、修士課程のオリエンテーション会場で邂逅した田巻教授とは、それまで全く面識がなかったにもかかわらず、唐突に指導教官のお願いをしたところ快く引き受けてくださいました。恩師よりも 6 歳年上のヒッピーは、「田巻松雄」という優れた指導者と知己を得ることができたことに心から感謝しています。フィリピンというキーワードが縁で、田巻ファミリーの一員に加えていただきました。「田巻松雄」の DNA をしっかりと継承し、マイノリティと位置付け

られる人々や社会的弱者に関心を寄せながら、これからも人道支援活動に取り組んでいきたいと考えています。恩師とは真逆な不良の劣等生であったヒッピーですが、今は「多文化共生」というテーマを通して、根底で深く結び合っていると確信しています。

2022 年 3 月 12 日、田巻松雄教授の最終講義、「社会学的・国際学的な問題意識をベースとする 10 のワードとメッセージ」を拝聴する機会が得られた事に感謝。定年御退官心からお祝い申し上げます。「**感恩報謝**」

(国際学研究科 博士後期課程 国際学研究専攻 第 3 期修了生)

(2022 年 3 月 13 日原稿受理)

国際学部学位授与式から

国際学部

・学生表彰 1 名

該当者なし

2013(平成 25)年度より、学位記授与式において卒業論文を表彰する賞が設けられました。表彰者は以下の通りです。

・最優秀賞 2 名

- ① 千葉絵里香 「アジア・アフリカの「権威主義国家」を母体に持つ国民の視点から見た政治体制-高等教育を受けた在日外国人の聞き取り調査から-」 阪本研究室
- ② 浅野琳香 「インドの若年層における生理用品と月経観-月経教育を受ける意義について-」 重田研究室

・優秀賞 4 名

- ① 酒井愛佳 「香りのエスカレートと企業の取り組み」 高橋研究室
- ② 金子茉莉 「植民地都市形成の再考-台北亨仔脚にみる伝統の誕生と近代の包摂-」 松金研究室
- ③ 岡本美咲 「「もう一人の自分」の表彰から見る、ボーカロイド作品の特徴とその文化背景」 大野研究室
- ④ 浦田良平 「日本人の英語音声における歯擦摩擦音の知覚」 湯澤研究室

東南アジア支部だより

第 63 号から、タイ在住の**大畑美優紀**さん（国際学部社会学科第 1 期生・国際学研究科国際社会研究専攻第 1 期生）が発起人となり、国際学部同窓会および大学院国際学研究科同窓会の東南アジア支部としてニュースレターを創刊しました。2019 年 4 月から、年 4 回から**年 2 回発行（4 月 1 日、9 月 1 日）**の変更になりました。

今回の第 13 号の内容は、1. ごあいさつ 2. おしらせ 3. 連載コラム タイの昨今～第 13 回～ ～オンライン世代の子供たち～ 4. 新年度企画 ゆく年 2021 年度のわれ

らの反省会 われらのゆく年くる年 5. 連載コーナー ▶トコロ変わればザ★談会 第六回 あなたの地域のコロナ禍下観光事情 ▶狙えインスタ映え！？ アジア取材雑記第9回 空前の“スズブーム”がもたらす現実 ▶第九回 ～懐かしの一枚～ とともに感じる東南アジア です。

EU 支部だより

第38号からイタリア在住の松原真実子さんによる知求会 EU 支部だより「Newsreel World」を発行してきました。今回の41号の内容は、1. イタリアに要請 ウクライナ大統領プーチン氏所有疑惑の大型ヨット押収要請 2 EU 支部だより —Covid とウクライナ—です。配信方法は、画像が掲載されているために別便で配信します。ファイル容量が大きいことで、ニュースレターが受信できない場合にはその状況をお知らせください。

編集者のひとりごと

- 知求会ニュース第80号の岡田三郎先生の訃報に対して、追悼文を掲載することができず心残りでしたが、第81号で中村真先生に寄稿をお願いし、無事掲載できたことで一区切りがつけました。(合掌)
- 悪戦苦闘してきた古文書解読の勉強の成果が出ました。成績は芳しくないのですが、3月半ば過ぎ「古文書解読検定準2級」に合格しました。今後は、通信教育の課題復習と検定問題の復習を終えてから、夏に向けて「古文書解読検定2級」に挑戦するところです。
- NHK 学園の生涯学習通信講座「古文書を読む 基礎」は秋の「日本語教育能力検定試験」に2度目の受験をした後に継続して学習しようと考えています。
- 「日本語教育能力検定試験」は平成29年度に独学で挑戦しましたが、半分の成績で不合格でした。今回は制度変更に伴い最期の機会となることが再受験の最大の動機です。ですから、なにがなんでも合格しなければという一発必勝の気概です。
- 2018年6月14日からMicrosoft Office Specialist (MOS) に挑戦し続けて、2022年3月19日に一般レベルのMOS マスター (Word, Excel, PowerPoint) を取得できました。約4年間の長い道のりでした。現在はAccessに挑戦中です。年内には合格したいと思っています。その後は上級レベルのWord エキスパートやExcel エキスパートに挑戦し続けるつもりです。ですから、健康である限り年中学習時間がたりないですね。

編集後記：2010年4月26日から **知求会ニュースのバックナンバー**は **国際学部同窓会 HP** (<http://www.afis.jp>) で見られるようになっています。

同窓会会員の皆様へのお願い：**住所、勤務先および携帯電話番号、メールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。**chikyukai@freeml.com
